長編小説

戒厳令1988年ソウル

落合信彦

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
（郵便番号112）
光文社　文芸編集部

戒厳令1988年ソウル

一九八六年二月二八日　初版第一刷発行
一九八六年三月二五日　第二刷発行

著者　落合信彦
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三／郵便番号112
電話　東京（〇三）九四二—二二四一（代）
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　萩原印刷
製本所　ナショナル製本
定価　一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Nobuhiko Otiai 1986
ISBN4-334-92124-8　Printed in Japan

戒厳令

1988年ソウル

落合信彦

装幀　渋川育由
装画　石川　俊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

一九八七年十二月
アメリカ・バージニア州ラングレー

フランク・モンタナの運転するシボレー・カマロはひっそりと静まりかえったブレントウッドの住宅街を抜けて南に向かうターンパイクに入った。時折り反対方向から走ってくるトラック以外ほとんど車の姿は見られない。前夜まで降り続いた雪が道路の両側に三十センチほどの高さに積まれている。ドンヨリと重く曇った空は典型的な東部の十二月の一日を予告していた。

ハンドルを握りながら彼は二、三度首を左右に振った。肩がやけに凝っている。寝不足の時はいつもこうなる。肩が石のように硬く張ってそれが次第に偏頭痛を誘発する。そしてその日は確実に不快に終わる。

ここ一週間はそういう日の連続だった。朝は六時、帰宅は午前二時か三時。妻や子供とはひと

言も話をしていない。しかし、これは彼だけに限ったことではなかった。海外諜報部や分析部で働く者たちも皆同じだった。

車は十五分ほど走ってターンパイクを降り、やや細く直線的な道路に入った。右側に大きなサインが立っている。

〝部外者立ち入り厳禁！　不審者に対して守衛は発砲する許可を有する〟

両側を高い樹木にはさまれたその道路を五分ほど行くと守衛の詰所があり、電動式遮断機が道を防いでいる。詰所の中には常時五人のフル装備した守衛がいる。

モンタナが車を停めると中から二人の守衛が出てきた。

「おはようございます。モンタナさん」

一人が車の窓越しに中をのぞき込みながら言った。もう一人は一メートルぐらい離れたところに立って拳銃を抜きバック・アップ態勢をとった。毎朝のことながらあまり気持ちのよいものではない。

モンタナは軽くうなずいて胸のポケットからプラスティック製のカードをとりだしてそれを守衛に手渡した。

守衛はそのカードをそばにある駐車メーターのようなものの中にさし込んだ。ピーッという音とともに緑色の明かりが点滅した。もし音がせず明かりが赤なら、たとえCIA（中央情報局）海外諜報部次長の地位にあるフランク・モンタナでもここから先に進むことは許されない。

「どうぞ」
守衛がカードをモンタナに返しながら言った。もう一人はすでに拳銃を腰のホルスターにおさめていた。
そこから五百メートル先が第二の検問所だ。そこで同じような手続きをすませる。
さらに五百メートル進んで最終検問所を通過すると白い巨大なビルが行く手を塞ぐように建っている。地下三階、地上十階建て、七つのウイング。通称〝エージェンシー〟または単に〝ラングレー〟。アメリカ合衆国の目と耳、CIA本部である。
モンタナの車は南ウイングの裏側にある幹部専用通路に入り、そこから地下の駐車場へとすべり込んだ。二百台分のスペースがある駐車場の半分以上はすでに埋められていた。
そこから彼は直通エレベーターを使って海外諜報部が全フロアを占める三階へ上がった。何人かの部下が忙しそうに廊下を行き来している。彼らと挨拶を交わしながらモンタナは廊下の突き当たりにあるオフィスへと急いだ。
「グッド・モーニング、ボス！」
ドアを開けると、秘書のマーサの快活な声が響いた。
「ラウズィ・モーニング」
ふてくされた表情で言うモンタナの言葉に彼女が笑った。
「コーヒーを入れましょうか」

「頼む」
コートを脱いでそれをマーサに渡して彼は奥の自室へと入った。
机の上には書類が山と積まれていた。昨夜読み切れなかった分だが、今朝はさらに増えているように見える。
モンタナは机にすわってしばらく天井に向かって目を閉じた。頭がずきずき痛み始めた。せめてあと一時間睡眠が欲しいと思った。だが事態が事態だけにそんなのんきなことも言っていられない。
一週間前から彼が目を通さねばならない報告書の量が飛躍的に増大した。それらの信頼度をチェックし、確実かつ絶対に必要と思われる情報のみをふるい分けて上司に報告するのが彼の仕事のひとつである。この場合の上司とは単に部長や局長、さらにＣＩＡ長官だけではない。合衆国大統領、国務長官、国防長官なども必ず彼の報告書に目を通す。極言すれば合衆国の対外政策の一部は彼の能力いかんによって左右されるとさえいえる。多大な労力と時間を費やすのは当然のことなのだ。
モンタナは目を開けて椅子にすわりなおし、報告書を読み始めた。
報告書はすべて極東地区課からのものでその大部分がフィリピンにおける反政府分子のテロ活動やゲリラ対政府軍の戦闘に関するものだった。

この四年間のうちにフィリピン国内の情勢は急激に悪化した。きっかけはベニグノ・アキノ暗殺事件だった。

アメリカに亡命していた元上院議員アキノは一九八三年夏フィリピンの政治改革に乗り出すべく帰国した。しかし、マニラ空港で飛行機から降りた途端、政府軍兵士によって射殺された。その時の情景は生々しくテレビに映し出され世界中を驚かせた。

この事件は大統領フェルディナンド・マルコスと彼の政府に対する国民の信頼を一挙に吹き飛ばした。これに加えて経済政策の失敗は国民の間の貧富の差をますます拡大させ、修復不可能とさえ言われるところにまで達していた。学生を中心とした大々的なデモがマニラ首都圏で繰り広げられ始めた。

危機を読みとったCIAは合衆国大統領と議会の有力者たちにフィリピンがのっぴきならない状況にあることを報告した。これを受けた大統領と議会は何度もマルコスに特使を送り、国内改革に着手するよう説得した。改革をせねば援助を打ち切るという脅しまでかけた。しかし、マルコスは聞く耳も持たなかった。

アメリカはフィリピンに極東最大の基地をふたつ持っている。スービック湾海軍基地とクラーク空軍基地である。これら二基地を使用している限り、アメリカは決して自分を見放さないとマルコスが考えているのは明らかだった。

その間事態は悪化の一途をたどった。デモは暴動と化し、都市部だけではなく農村部をも巻き

込んでいった。
昨年大統領選挙が行なわれはしたが、それも単なる茶番劇でしかなかった。マルコス対アキノ未亡人コラソン・アキノの一騎打ちであったその選挙はマルコス側の選挙妨害と開票操作によって辛うじてマルコスの勝利に終わった。
この頃すでに共産ゲリラはかつての弱小集団から一大勢力にのし上がっていた。今では白昼堂堂とマニラの街中で政府軍と戦闘を交えるほどの火力とマンパワーを持つまでになった。

報告書を読みながらモンタナは憂うつな気持ちにかられていた。ほとんどの報告書が共産ゲリラのすさまじい勢いと政府軍の無力さを伝えていたからだ。
ドアが開いてマーサがお盆を手に入って来た。コーヒー・カップと水の入ったグラス、そして二錠の錠剤を机の隅に置いた。
「いま飲んでおいたほうがよいと思いますよ」
モンタナは錠剤を口の中に含んで水で流し込んだ。
「ああ、そうそう、先ほど長官が自宅から電話してきまして九時にぜひ次長に会いたいとのことでした」
「九時か。確かペンタゴン（国防総省）のキュービリック大佐と会うはずだったな」
「ええ、でも長官がどうしてもということなので受けておきました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モンタナがうなずいた。相手が長官ならいたし方がない。
「キュービリックとのミーティングは延期せねばならんな」
「それはもうしておきました。明日の十四時、オッケーだそうです。それからもうひとつ。AP通信のキャラハンから二、三度インタビューの申し込みがありました。極東情勢について次長の話を聞きたいとのことでした」
キャラハンとは前にも何度か会っている。ディスインフォメーション（逆情報）工作などを行なうときにはなかなか利用価値のある男だ。
「それで？」
「断わっておきました。いまはインタビューに応ずる時期ではないと思いましたので」
確かに彼女の言うとおりだ。いま極東について話すのはセンシティヴすぎる。
モンタナは彼女を見上げて満足げな調子で言った。
「君がいないと私はどうしていいかわからんよ」
マーサがニッコリ笑って、
「その言葉、今度の人事異動の時、忘れないでくださいよ」
「心配するな。大統領の秘書とだって君をトレードするなんてことはしないさ」
半分本心から出た言葉だった。実際、マーサ・クラインは抜群に有能な秘書だった。二年前、モンタナが現在のポストに昇格した時配属されてきたのだが、第一印象はそれほどよいものでは

なかった。化粧っ気のまったくない顔は決して美しいとは言えないし、着ているものも地味で二十五歳という年齢よりはるかに老けて見えた。典型的な中西部の田舎からやってきたオールド・ミスという感じだった。とてもラッドクリッフで心理学を専攻した才女とは思えなかった。しかし、彼女の仕事ぶりを見た時、その感じはいっぺんに拭い去られた。すべてをビジネスライクにテキパキとさばき、私的感情というものをいっさい交えず、誰に対しても決してものおじしない。秘書としてのベーシックであるタイプ、速記はもちろんのこと、スペイン語、ロシア語、ドイツ語を自在にこなす。頭の切れ、洞察力、献身的な姿勢、どれをとっても単なる秘書としておくには惜しい人材だとモンタナはたびたび感じていた。

ある時、彼は彼女に秘書を辞めて海外諜報部の一員になる気はないかとたずねてみた。しかし、彼女は自分には秘書の仕事がいちばん合っていると言ってとり合わなかった。

いまではマーサ・クラインはモンタナにとって秘書というよりもパートナーとしてなくてはならない存在だった。

マーサが部屋から出て行くと入れかわりに海外諜報部主任のボブ・フリーマンが入ってきた。いつになく暗い表情をしている。

「どうした、ボブ。あんたも偏頭痛かい」

モンタナの言葉には応えずフリーマンは机の前に置かれたアームチェアにどっかりと腰をおろした。モンタナの体内をある種の緊張が走り抜けた。

「フィリピンだな」
モンタナが言った。
フリーマンは大きくうなずいてモンタナを見据えた。
「われわれが最も恐れていたことが現実になってしまった」
モンタナは黙ったままフリーマンの次の言葉を待った。
「いましがたマニラ支局から入った情報なんだが」
と言ってからひと呼吸おいてフリーマンが続けた。
「クラーク空軍基地がゲリラに襲われたんだ」
「クライスト!」
モンタナが小さくうめいた。
「相手は二千人近かったということだ。基地の四方から同時攻撃を仕掛けてきた。一応撃退はしたが、アメリカ兵五十人が殺され、ハンガーの中に駐機中のF14が三機破壊された。今スービックから海兵隊五百人が向かってるが、第二波攻撃を受けたらもつかどうかわからんという状態だ。なにしろ相当な破壊力を敵は持ってるらしい」
「奴らに与えたダメージは?」
「死者が約百人、負傷者が百五十人。捕虜が三十人。奴らにとっちゃ屁でもない数だ。替わりはいくらでもいるからな」

「なんてことだ！　あれほど警告しておいたのに。ペンタゴンの奴ら、いったい何をしてるんだ！」

ずっと以前からＣＩＡはペンタゴンに対してクラーク、スービック・ベイ両基地が必ずゲリラ攻撃のターゲットになると予告し警備兵力を五倍に増やすよう進言していた。クラーク基地の警備は若干強化されたという報告を受けてはいたが、それが形だけのものにすぎなかったことは今のフリーマンの言葉で証明された。

「ペンタゴンがわれわれの警告を素直に受け入れたことがあったかね」

フリーマンがにがにがしげに言った。

これまでにもＣＩＡは何度か世界中のテロリストやゲリラの動きについてペンタゴンの軍人たちに警告してきた。しかし、それらの警告は一度として生かされなかった。結果として多くの人命が犠牲になっただけでなくアメリカの威信にも傷がついた。

そのよい例が一九八三年十月に起きたベイルートにおけるアメリカ海兵隊司令部爆破事件だった。

その事件が起こる二週間前からＣＩＡは―イスラム聖戦機構―イスラミック・ジハドが海兵隊司令部に対して攻撃を仕掛ける決定を下したという確実な情報を握っていた。

この情報はイスラエルのモサドも確認した。ＣＩＡはいち早くこれをペンタゴンに伝えた。さらに攻撃三日前ベイルートのＣＩＡエージェントが攻撃の正確な日時を知らせてきた。もちろん

この情報もペンタゴンに伝えられた。だが故意か何かの手違いによるものかその情報はベイルートの海兵隊司令部には伝達されなかった。

ＣＩＡのつかんだ情報が正しかったことはその後の事態の進展が証明した。ベイルート海兵隊司令部はイスラミック・ジハド・メンバーによる爆弾もろとものカミカゼ攻撃にさらされ壊滅し、二百人余りの海兵隊員が命を落とした。ペンタゴンがＣＩＡの情報どおりに動いていたら間違いなく回避でき得た事件だった。

「まったく救いようのない連中だな」

モンタナが首を振り振り言って、

「それにしてもスービックから五百人の海兵隊員をクラークに送ったとなると、今度はスービックがガラ空きになるんじゃないか」

「そっちのほうは大丈夫だ。オキナワ駐留の海兵隊をまわすことになっているらしい。一時しのぎにはなるはずだ」

「希望的観測だな」

モンタナの言葉にフリーマンがうなずいた。

「そうかもしれん」

と言ってから少し声を落として、

「そんなことよりフランク、ちょっとおかしなことがあるんだ」

「……？」
「捕虜にしたゲリラの中に何人かの北朝鮮特殊部隊員がいるというんだ」
「第八軍団か」
言葉では平静を装っているものの彼は内心仰天していた。第八軍団と言えば朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が誇る世界最大規模の特殊部隊だ。
その第八軍団の隊員がフィリピンでゲリラ活動に参加している。共産ゲリラにとってはこの上なく頼りになる味方だ。
「どうもわからんな。いま北はアメリカと真っ向からやり合う立場にはないはずだし」
フリーマンが頭をかしげた。
北朝鮮は現在前代未聞の経済破綻に直面し、西側諸国との関係改善にやっきになっている。これに関しては金日成主席自ら何度か声明を出している。その北朝鮮がこともあろうに西側のリーダー、アメリカに対して挑戦状をたたきつけるようなことをやったわけである。
「どうもロジカルじゃない」
フリーマンがもう一度頭をかしげた。
「ロジカルであろうがなかろうが、奴らがフィリピンにいるということは確かなんだ。捕虜にした連中のほかにもまだいるだろうし、これから増強される可能性だってある」
いら立った口調でモンタナが言った。彼は北朝鮮軍のフィリピンへの介入を予期できなかった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com